隠蜃気楼

辺り一面の古びた屋敷
小雨の中で、一人漂い歩いて
濡れていくコート
雨よ、どうぞ、私を濡らしておくれと
傘など要らずに
靄がかり、ぼんやりする頭
あたかも夢の中の蜃気楼のよう
あの大勢が、うごめく街
彼女が部屋を出ていった、あの大都会
些細な訳での言い合いだけで
そんな荒れたイメージの残る街
きっと今も彼達や彼女達、人々の情愛や葛藤や決別が
渦巻いては消えていっているのだろう
手のひらに、まだ残る彼女の、ぬくもり
そんな街から、抜け出した私に
安らかな安ど感が癒しを、与え
だけど、心の、どこかが、人肌恋しい

……もっちープリンス

私の、けはいを感じてくれる人さえ居ない、この辺りで
私は、あたかも捨て猫でいるかのよう
さまよい歩いて、辿り着いたのは、誰も居ない古びた、小寺
ひとまずの雨宿り
ふっと、ため息をついた私に
どこから来たのか、一匹の野良猫
野良猫と私の、しばしのアイコンタクト
心を許し、私の足元に寄ってきた、その野良猫を
しゃがんで、包み込むように、そっと抱きしめた
何だか、靄が薄れだし
朝日が差し込む部屋で寝ていた
穏やかな空気が私を包み込む